

序

街を歩くと、時に「駐車場に付き駐車禁止」という貼り紙などを見かけることがある。すぐその意味は分かるが一瞬、戸惑いを感じる。何か矛盾に見える一種のパラドックスだからである。この場合は日本語独特の簡略表現のためにパラドックスに見えるだけのことで、日常会話のジョークと考えれば、実際には特にその論理を問題にすることもない。この種の表現に関わるパラドックスではクレタの哲学者エピメニデスが言ったとされる「クレタ人は嘘つきだ」という言明が有名であり、その真偽を問い始めると考えるほど分からなくなってくる。

一般に論理が拠り所となるような実社会のコミュニケーションでは、その整合性が問題になる。論争においては事実認識に関わる水かけ論はともかく、相手の論理的矛盾について如何に優位に立つかが勝負の分かれめとなる。しかし論理的に正しくても遂に相互理解の得られないことがある。相入れない論理の両立した場合、第三の論理に委ねて解決する方法もあるが、それぞれが主張を通すために論理の場を越え、形を変えて争われることのあるのは人間社会でよく見られるところである。

もともと論理を大切にするのは、そこに共通の認識を得るのが目的であるから、論理の争いによって共通の場を失うのはパラドックスである。つまり異なる論理を論理以外の手段で否定しようとする所にパラドックスが存在する。ゲーデルの不完全性定理の例に見られるように、どのような論理にもパラドックスはあり得る以上、主張を是が非でも通さねばならぬ場合とは自らの存在の可否が問われるような価値に関わる問題に限られるのではあるまいか。これはより本質的には倫理の問題である。ここには究極的なパラドックスとして相矛盾する「公」の倫理と「私」の倫理の問題があり、少なくとも今世紀には乗り越えることのできない課題として残される筈である。

研究が論理とその整合性の追求を使命とするならば、むしろパラドックスの可能性のある所に研究の意義があるというパラドックスも成立する。さらに、研究は論理の世界に留まる限り遂に不完全であるとする論理が可能ならば、論理を越えたアプローチにこそ真の研究の場が存在するというパラドックスも成立するのではないかと思う。

1991年10月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士 太田利彦